



令和2年2月8日

学びの広場

京都市教育委員会 教員養成支援室

仲間のレポートに学ぶ

1月25日に最後の専門講座を行いました。全部で4講座を設定しましたが、希望校種に限らず、他校種・職種に関心をもって前向きに受講する姿が見られました。教育学講座は今日を含めてあと3回です。



「高等学校における教師の実践」 講師：学校指導課 滝本 順之 指導主事



全体会において私はまず「なぜ教師を目指しているのか」という質問に考えさせられました。教員採用試験に合格してからも、教師をする上で「なぜ目指したのか」は自分の根となる部分だと思うので、滝本先生もおっしゃっていたように、きちんと自分をわかっておく必要があると感じました。私は小学校が第一志望なので、高校は小学生にとってまだまだ先のことだと思っていたけれど、小・中学校にいる子どもの可能性は無限大、義務教育は子供の芯を作る場所だと聞いて、小・中学校で学ぶものが高校につながっていくと思いました。また、高校から大学へ、そして社会へと学んだことはつながっていき、成長していくのだと思いました。

分散会では、教師の体験を話すこと、信頼を得る授業、そして自分ができないことを見つめ直す、反省する、ということが大きなテーマとして出ました。教師が自分の実体験を話したり、ある境遇の時にどう思ったかなどを生徒に話したりすることで、生徒は「先生もそうだったのだ」と少しでも教師に話してくれ、希望を言ってくれる機会が増えるのではないかと感じました。また、授業を端的にするのではなく、少しでも自分の話をすることで、生徒から「この先生に話を聞いてほしい」と思ってもらえ、信頼関係が築けてくると感じました。教師の生活も、今の自分の生活もきちんと見つめ直して反省する、振り返ることが大切だと感じました。



「もとめられる養護教諭像」 講師：体育健康教育室 岩本 順香 指導主事



養護教諭が行っている仕事を知り、連携する場合にどう関わっていけばよいか考える機会になった。児童の健康や安全のための危険の察知・予防、養護教諭や地域の人々から児童の様子について情報を得ることが一番必要であり、このことは養護の立場でも担任の立場でも同じだと考える。チーム学校として一人の児童に何人もの大人で支え見守っていく姿が求められている。児童の健康問題が多様化している現在、健康相談や保健組織活動が養護教諭の職務にあると知り、学校現場での協働の機会が多岐にわたる実例を学んだ。保健室で見せる姿と教室で見せる姿、どちらも子どもの声であることを意識して、協力を得ながら子どもと関わっていきたいと思った。

分散会では、養護志望の2人と専門性について話し合った。小・中・高と子どものケガの仕方や関わり方が違うこと、共通して子どものことを知るためには、子どものことを認め、安心して本音を話せる場所であり続けることが重要だと知った。子どもと関わる時間が多くなるということは、それだけ多忙になるということである。時間の使い方を今のうちに見直し、重要なことは何かタスク管理をするくせをつけることが課題となった。児童の様子を観察し、伝える力を養うために、児童の背景にあるもの、児童の样子的原因は何か、情報を得ることが大切になってくる。頭ごなしに否定せず、児童が訴えようとしていることをつかみとる力を身に付けたい。想像すること、周りとのコミュニケーションをとり繋がりを持つことは、教師として、社会人として求められる力だと考える。



「総合支援学校における教師の実践」

講師：総合育成支援課
北福 浩章 指導主事



総合支援学校、育成学級、普通学級の3つの場における特別支援教育のあり方について学びました。私は、障害の有無にかかわらず共に生きていく社会を目指すことが、障害のある方の社会参加や自立につながる重要な考え方だと思いました。しかし、そのようなインクルーシブ教育を行う、つまり多様な学びの場を選べるようにするためには、教師の質を上げることが求められます。総合支援学校で学ぶことを勧められた児童を育成学級で指導することになった場合、障害に関する幅広い知識と、一人一人に応じた適切な支援が必要になります。総合支援学校の教員だけでなく、通常の小学校、中学校の教員すべてが指導することのできる高いスキルが求められると思いました。分散会では、障害のある児童とかかわる際に重要だと思うことを大きく分けて2点考えました。1点目は温かい言葉をかけたり、たくさん褒めたりすることです。子どもは誰であっても褒められると嬉しいと思います。特に障害のある児童は褒められる経験が少ない子もいると思うので、認めることが信頼関係を築く上でも大切だと思います。2点目は極めるということです。本人がどこに困難を感じているのか、どこまで本人ができてどこから支援が必要なのかを見極める力が求められます。また、児童の次の課題を設定したり、普通学級に通う発達障害の傾向がある児童を支援したりする場においても必要なことだと考えます。

これから障害のある児童と関わる中で「子どもはできる存在」であるということ意識していきたいと思いました。できないところばかりを見るのではなく、児童の強みやできること、またできる可能性のあるところなど、ポジティブなところに目を向けるストレンクス視点を身に付けたいと思いました。



「もとめられる栄養教諭像」

講師：体育健康教育室
小山 ひとみ 主任指導主事



今回の講義で学んだことは、「京都市の給食のすばらしさ」です。6年間食べてきた給食について改めて学ぶことができ、とても良い時間になりました。「手作り」にこだわる理由も一人一人の子どもを大切にすることにつながっていることが分かりました。一人一人の児童と接し、向き合うことで見えてくる課題を理解し、寄り添うことで、子どもの苦手に立ち向かう勇気を育てることができるのだと思いました。

分散会では、小山先生も入ってくださり話をすることができました。京都市のやり方についても詳しく教えていただくことができたので良かったです。献立作成や親との関わりなど、不安に感じていることはみんな同じなのだということも分かりました。専門知識を生かし、担任の先生や子どもたちにも分かりやすい対応や授業を行っていくことが求められていると思いました。

今回の話合いで、自分の知識やスキルの少なさを実感しました。小山先生は「そう思っているだけで一歩進んでいる」と言ってくださいましたが、今日のこの気持ちを大切にあと少し学び続けていきたいと思いました。京都市のすばらしい給食を伝えていける一員として働きたいという思いがとても強くなった一日でした。子どもの将来と毎日の実践スキルをより良いものにしていける栄養教諭になります。

FW「先輩の授業に学ぼう」

白河総合支援学校 (2/5)

就労を目指した授業や学校の取組について、教えていただきました。



下京中学校 (2/6)



担任が進める、道徳科の授業を参観させていただきました。

